

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第四十七回）

いこまやま

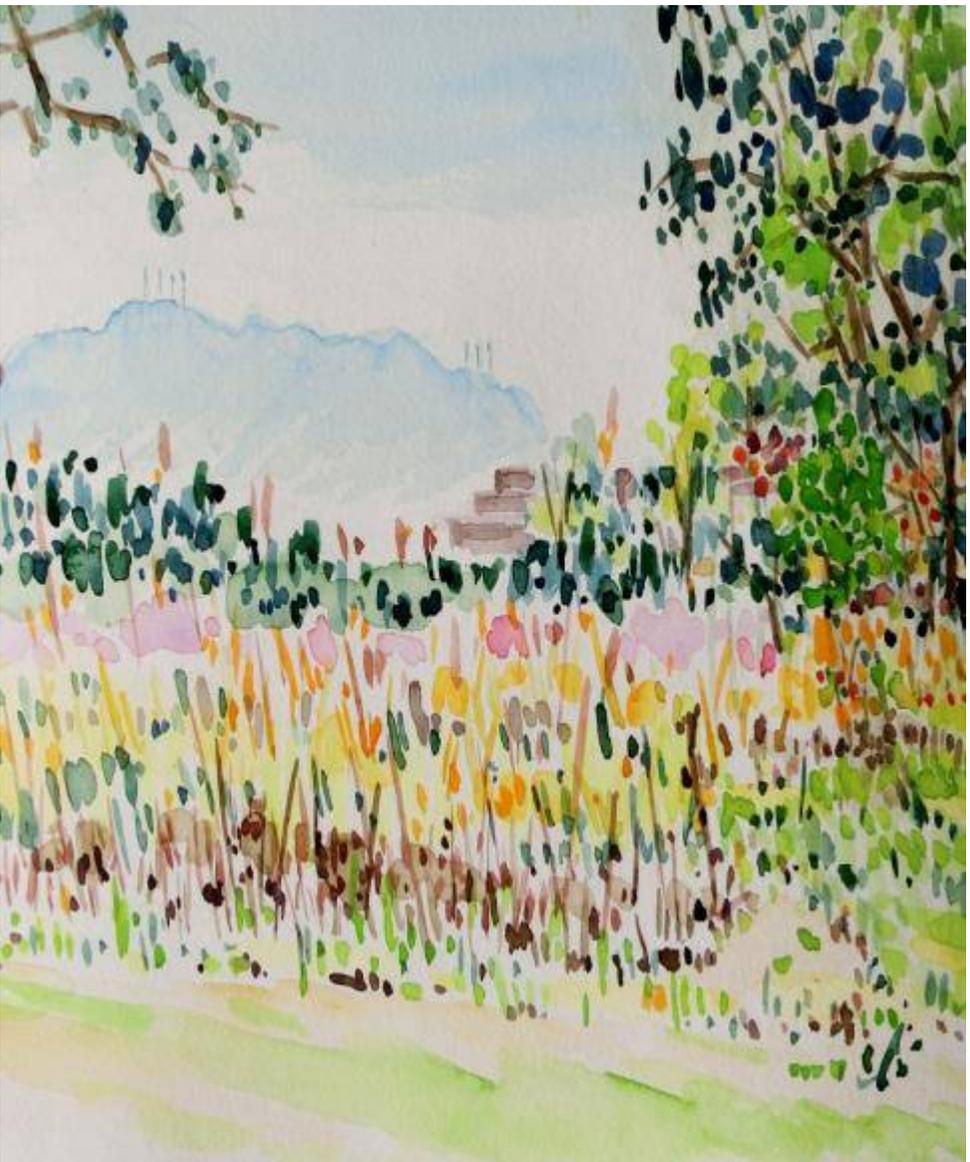
遣新羅使と万葉集 「生駒山」

（平城京から筑紫（九州）・朝鮮半島・大陸への道）

① 大阪平野と奈良盆地を隔てて屏風のように立ちはだかる生駒山地。主峰の生駒山は標高六四二メートル、奈良時代の都「平城京」（現・奈良市佐紀町）の自然の要害であるとともに古来、この山を様々な人と物が越え、難波津（古代、大坂湾に存した港名）から瀬戸内海を経て筑紫（九州）、朝鮮半島、中国大陸へとつながる海上交通の重要な起点でもあった。

（写生地）平城京跡から西へ10数キロ離れた奈良県と大阪府の境界地にそびえる

「生駒山」を描く（杏花）



② 古くから生駒山を越える峰道はいくつかのルートがあったが和銅三年(七一〇)に都が奈良盆地の北端、平城に遷されてからは、平城京と西の玄関口であった難波津へは生駒山の南、標高四五メートルを越える峠「暗峠」くらがりとうげ越えが東西一直線の最短距離の道であったことから主要ルートであったとの説が一般的である。

・この大阪と奈良を暗峠を越えて通じる旧街道は「暗越奈良街道」と呼ばれ、とくに江戸時代には伊勢参りの道として賑わったことが『河内名所図会』に、「大阪より大和及び伊勢参宮道なり、峠村には茶屋旅舎多し」と記されている。

・この旧街道は現在の大阪(大阪市中心区)と奈良(奈良市三条)間、全長約37 kmの国道308号線にあたる。

③ 「暗峠」は奈良県生駒市から大阪府東大阪市へ通ずる約2.5 kmの峠道であるが、道は険しく急峻で道幅も狭く今も公道の中では難路として有名である。

◎ 生駒山を越える道は、万葉人にとっては妻恋いの道であつたらしく万葉集には次の歌などが詠われている。

○天平八(七三六)年六月、新羅(朝鮮半島南東部にあつた国)に遣わされた使人たちは瀬戸内海を経由し筑紫を経て朝鮮半島へ向うため、大和朝廷の外港であつた難波津に集合してから出港した。

・万葉集には遣新羅使人たちは、出帆までに時間があつたのか寸暇を割いて、当時の都、平城京に残した妻や恋人に、ひと目の逢瀬を求め、京と難波の境界にある「生駒山」を越えて寸时会い、またトンボ返りで難波の港に戻つたであろうといわれる時の次の二首の歌がある。

1) 夕されば ひぐらし来鳴く 生駒山

越えてそ吾が来る 妹が目を欲り

卷十五—3589

作者 秦 間満

(解説) 夕方になると、ヒグラシが来て鳴く生駒山を、越えて私は行く。妻に逢いたくて。
*「目を欲り」は逢いたい之意。

・作者が生駒山を越えた峠と見られている「暗峠」の地名は樹木がうつそうと覆いしげり、昼なお暗いことが地名の由来とも言われる。

・この歌に詠われている「ヒグラシ」は九州・四国・本州の山地、特に広葉樹やスギなどの薄暗い林内に生息し六月下旬から九月中旬にかけて、朝四時から七時、午後四時から七時ころまで鳴き、雨の日は日中も鳴く。鳴き声がなんとなくもの悲しく哀調がある。

・井村哲夫著「万葉の歌」には伝未詳であるが遣新羅使人の一人秦 間満が就航前の短い暇をみつけ慌ただしく生駒山を越える暗峠を経て難波津から約30キロ離れた平城の都に住む妻のもとへ急いだときの歌である。と述べられている。

2) 妹に逢はず あらば為方無み 石根踏

む 生駒の山を 越えてそ吾が来る

(解説) いとしい妻に逢わないでいれば、どうにもしようがないので、岩を踏んで歩く険しい生駒山を越えてやってきたことだ。

・この歌の題詞は「しま(暫)しく私の家に還りて思を陳ぶといふ。」とある。即ち、難波津で就航を待つ、遣新羅使の一人が、ごく暫くの間、一刻もはやく恋しい妻に逢うため、石や岩のごつごつした歩きにくい道であったが距離の短い暗峠道を選び平城にある家に帰った時に詠ったものであろう。

(参考文献) 日本古典文学大系「万葉集」、井村哲夫著「万葉の歌」山崎しげ子編「奈良大和路の万葉歌碑」等

(写生地)

・生駒山の東麓を南北に運行する近鉄生駒線「南生駒駅」から国道308号線がほぼ一直線に西にある暗峠に向かう。坂道が勾配を強めるあたりの奈良県生駒市萩原から生駒山の東側のほぼ全景が見渡せる萩原町の高台にある棚田横から山頂にテレビ塔が林立する生駒山と中腹まで家並みが続く暗峠方向を描く。(杏花)

